

NHK教育番組『あしたをつかめ』ディレクター

中村 由弥子

NAKAMURA Yumiko

さん

撮影チーフ

遠藤 大

ENDO Masaru

さん

に伺いました

働いている人たちの顔が見えるように！

二〇〇七年八月二十日(月)
土木学会役員会議室「ザマーミロ、サラリーマン」
という気持ちで番組をつくった

——首都高の建設現場で働く若者を取り上げた『あしたをつかめ』のテレビ放映は関係者には好評でした。もともと土木に興味をもたれたきっかけはあったのですか。

中村——私が番組で最初に取材をしたのが、道路のライン引きでした。それまで、私は大学行って会社に入ることが一番いいことだと思っていました。ところが、その子は高卒で、職人になるという

目的をもって、一生懸命生きていたわけです。そのことにびっくりして、ダラダラ生きていた私より、彼らのほうがすごいと思うようになったのです。

あの番組をつくったのは、「ザマーミロ、サラリーマン」という気持ちでした。彼らは、目標をもって生活をして、仲間たちと毎日楽しんで仕事をしています。成り行きで過ごしてきた私なんかよりも彼らのほうが立派。その気持ちを伝えたいと思いました。

——一般には、建築に比べ土木は何をしているのかわからないと言われます。番組をつくって、そういうことはありませんでした。

たか。

遠藤——長い工程のなかの一部分を、われわれは一ヶ月ほど取材をしたただけなので、全体像が大きすぎて、つかみどころがなかったですね。何を取り上げ、何を撮っていいかわからない。結局、その部分はどうなっていくのか、最後までわかりませんでした。ただ、建築と土木ということでは、やっていることは変わらないので、違和感はなかったですね。

きつかけさえあれば
若者も集まる

——土木には、土木技術者と職人集団、そして作業員という枠組みがありますが、取材を通じて区別はされなかったですか。

中村——額に汗して働いている現場の職人さんたちはいろいろな経

験をしていて逆に取材しきれなかったぐらいでしたし、一個人として取材しているという感覚でしたので、区別ということはしなかったです。

遠藤——最近、ドバイに取材に行ったのですが、外国では、職人、作業員はしっかりと分かれていますが、日本ではその区別はあまりないように感じます。

——日本では土木に携わる人たちの社会的な評価があまりなされていません。どうしたら、評価を上げることができると思いますか。

中村——土木は閉鎖的な気がします。普通に門を叩いても、入れてくれそうにはありません。テレビは来なくてもいいし、一般の人にも来なくてもいいという感じですが、取材に行くにもハードルが高い。現場は地下だし、危ないというこ

聞き手

溝渕利明
編集委員[writer] 駒崎文男
[photo] 崔健三

ともあって、特に女性は入ってはいけないという雰囲気があります。そういったハードルを取り除いてくれればと思いますね。

実際に行ってみると、現場はおもしろいですし、地下はロマンチックです。テレビ的にもみんな取り上げたいと考えていると思いますよ。

遠藤——海上保安庁に取材に行

きました。毎日体を鍛えたり、実際には大変で誰が行くのかと思いましたが、映画『海猿』の影響でいつもの何倍も希望者が集まったといえます。土木の現場は楽しいですし、思っていたほど給与も悪くない。やりがいをもっとPRするなど、きつかけさえあれば若者も集まるのではないのでしょうか。

働く人の顔が見えてくると、興味が出てくる

——土木の場合は、設計者の顔が見えてこないということがよく言われますが、どう思いますか。

遠藤——設計者の顔が見えてくる橋など、そういったものがどんなできてくるといいと思うのです。有名な建築家はたくさんいますが、逆に有名な橋をデザインした人というのは聞いたことがありません。

中村——初めて地下の現場を見たときには、すごくロマンチックだと思います。どうして、これを世の中に知らしめないのでしょうか。番組をつくったときも、局の人や視聴者の方が一番興味をもったのが、地盤凍結とシールドだったのです。みんな興味があるのですから、もっと頑張つてPRすればいいのと思います。

遠藤——「トンネルを掘っている」と言うと「ツルハシで大変ですね」と、言われます。普通の人のイメージはそんなものです。トンネルはどうやってできるかとか、シールドがどういうものかとか、わかっています。高校生が「地盤凍結をやるぞ」と言つて地盤凍結を行っている会社に入ってくることはな

いですよね。情報が少な過ぎるということはあるでしょう。その点では、われわれもいろいろな番組で取り上げられればいいなと思います。

中村——建築や土木は、テレビで放映すると、人気は高いし、反応はあります。職人さんを主人公にすると、みんな知らなかったと、興味をもってもらえます。番組で出た地盤凍結をやっている子も「土が好きだから」というところしか番組では登場しなかったのですが、彼の仕事に興味をもってもらえました。働いている人の顔が見えてくると、興味が出てくると思うのです。

遠藤——シールドなどは、社会科見学に行きたくても簡単には行けないですよ。行ってみたい人はたくさんいると思います。実際に現場に行ってみることができれば「すごいな、でかいな」と感動を与えることができます。

——お話を聞きまして、業界としても、もっと一般の人にPRし、理解を広げていく必要があると感じました。本日はありがとうございました。



中村由弥子（なかむら・ゆみこ）

TVプロダクションを得て、2001年NHK入局。「生きてるって、楽しいな〜」と思ってもらえるドキュメンタリー制作を目指して修行中。夢はタワークレーンの頂上で結婚式をあげる。好きな現場の職種は「トロッコ列車の運転手」

遠藤 大（えんどう・まさる）

1998年(株)NHKテクニカルサービス入社。以降NHKのドキュメンタリーで人を感動させる映像を撮るべくカメラを担ぐ。夢はブルドーザーをマイカーとして通勤すること。好きな現場の職種は「シールド工」